

# 武者小路実篤と志茂シズ・テイ姉妹

生 井 知 子

この度、武者小路実篤記念館の特別展「自伝『或る男』の青春・初恋・親友・そして夢へ」で、南木家に所蔵されていた志茂シズ・テイ姉妹の写真を公開することができたが、図録にはわずかな写真しか掲載できなかったのも、ここでは保存状態の良い他の写真をいくつか紹介するとともに、志茂姉妹をめぐる武者小路実篤年譜のあやまりを正したいと思う。

これまで、志茂シズ・テイ姉妹は、明治三十三年四月に上京、それぞれ実践女学校の三年生、二年生となり、シズが卒業したのは明治三十五年三月、テイが卒業したのは翌明治三十六年三月と考えられてきた。恐らく、その最大の根拠は、大正三年、実篤が数え年三十歳の時に執筆した「初恋」(一)に《始めてお貞さんが大阪から東京に出て来たのは今より十四年前で、自分の十六の時だった。それから三年の間、夏の休を別にしてお貞さんは自家の長家にゐた伯母の処に居た。さうして今から十一年前に乃ち自分の十九の時にお貞さんは大阪の家に帰つた。》と記されていることにある。

しかし、「初恋」「或る男」には、姉のシズが明治三十五年四月以降、テイが明治三十六年四月以降も実践女学校に在学していたことを窺わせる記述がいくつもあるのである。

例えば、「初恋」(十)には、実践女学校が遠くに引越し、通学に時間が掛かるようになって、実篤はティとゆっくり話が出来なくなったという切実な体験が書かれている。ところが『実践女子学園一〇〇年史』によれば、武者小路邸のすぐそばの麴町区三園町二丁目四番地にあった実践女学校が渋谷村常磐松に移転したのは、明治三十六年五月のことで、ティは、この時期まだ実践女学校に通っていたと考えないと筋が通らない。

また、「初恋」(三)には、『姉は三年に入り、お貞さんは一年に入るわけだったが、齡よりませてゐたので二年に入つた。』とあるが、『実践女子学園一〇〇年史』によると、実践女学校は修業年限五箇年の女学校である。姉のシズが明治三十三年四月に三年生になったのなら、三十五年四月から五年生であり、三十六年三月卒業が順当で、ティが明治三十三年四月に二年生になったのなら、三十六年四月から五年生であり、三十七年三月卒業が順当なのである。

事実、実践女子大学図書館所蔵の特殊コレクション・下田歌子関係資料の実践女学校卒業生名簿では、明治三十六年三月第二回卒業生として『志茂志づ』、明治三十七年第三回卒業生として『志茂てい』の名が記されている。そして、この名簿の記載の通りと考えれば、右に挙げた以外にも「初恋」「或る男」の中にあつた問題点すべてを説明できるのである。

例えば、「或る男」(七十)には、姉のシズが卒業し帰郷した時、実篤は学校の修学旅行で大阪博覧会に行つていたという記述がある。大阪博覧会とは、明治三十六年三月から七月まで開催された第五回内国勸業博覧会であると考えられ、志賀直哉の『稲村雑談』の『大阪の茶臼山で何回目かの内国博覧会があつて、学校の方の修学旅行もあつた』という記述から、学習院の修学旅行がこの時期にあつたことも裏付けられる。従つて、シズが卒業したのは、従来考えられていた三十五年ではなく、三十六年三月とすることでは問題は解消する。

また「或る男」(七十三)には、この旅行から帰つてまもなく、『華族女学校の卒業生の人々が発起で、下田歌子のために、ある催しをして、金をあつめることがはだてられ(中略)お貞さん(中略)が、仕舞ひをすることになつてゐた。』とある。恐らくこれは、実践女学校の建築費を助ける為に華族女学校の卒業生たちが明治三十六年四月二十五・二十六日に開催した癸卯園遊会のことである。

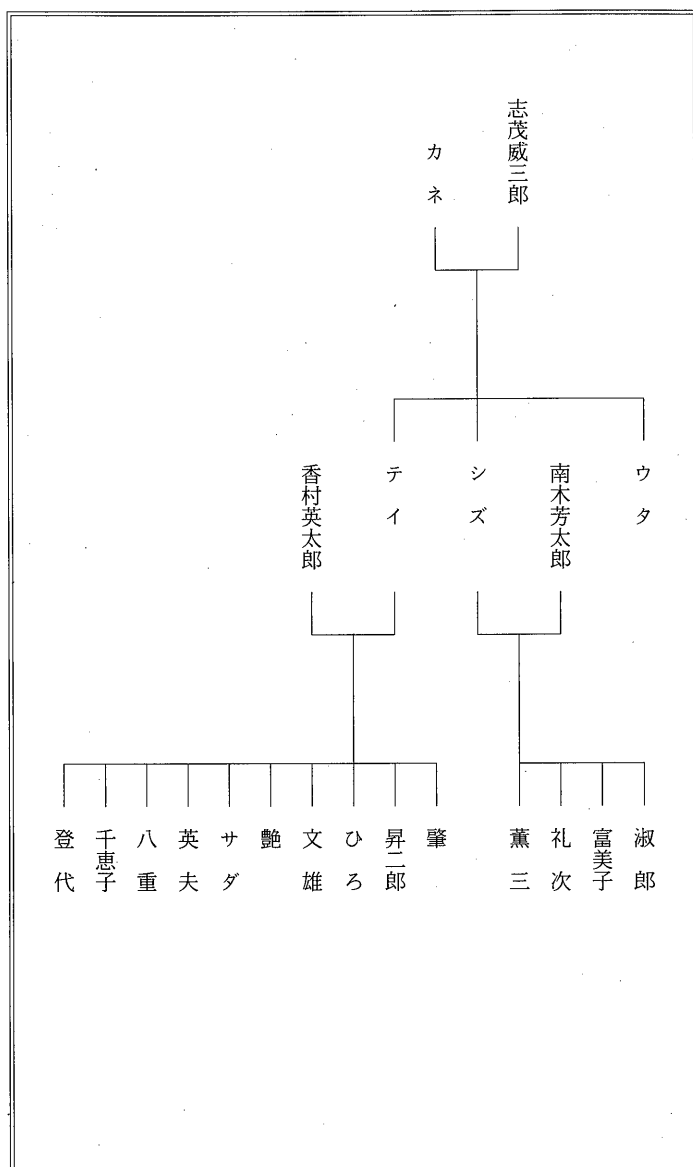
ことであると思われる。テイの卒業が三十七年ならば、この時期、テイはまだ東京にいたわけだから、極めて自然に理解できるようになる。

また「或る男」(七十五)などには、テイが卒業する前年の夏、実篤は聖書を初めて読みトルストイを知ったという重要な証言が出てくる。同じ所に、新学期から兄・公共は大学、実篤は高等科に進学と出るので、それは明治三十六年夏のことであると思われる。

大津山国夫氏は、『武者小路実篤論——「新しき村」まで——』で、「或る男」のこの記述を問題にし、テイとの別れは明治三十六年三月だから、その前年にトルストイを知ったというのは矛盾があるとし、明治三十五年夏、三十六年夏のいずれにトルストイに初めて接したのかと検討を加えておられる。大津山氏は、実篤が初めて読んだトルストイの作品が、明治三十六年三月刊行の加藤直士訳『我宗教』であることから、トルストイに初めて接したのは明治三十六年夏であると結論を出しておられるのだが、この問題も、テイの帰郷が実は明治三十七年三月であったと考えればすっきりと納得できるのである。

## 二

次に、南木家に所蔵されていた写真を何点かご紹介したい。次の略系図にあげておいたように、志茂シズが結婚したのは、後年雑誌「上方」の編集発行で知られることになる南木芳太郎であるが、二人の長男・淑郎のお子さんに当たられる紅子・純・紳ご兄弟のもとで、若き日の志茂シズ・テイ姉妹らの写真が多数発見されたのである。





【写真①】左より、テイ、ウタ、シズ、一人未詳



【写真②】左より、ウタ、テイ、シズ

まず最初にご紹介するのは、志茂ウタ・シズ・テイ三姉妹が写っている写真①と②である。いずれも上京前のものか。南木紳氏によると、シズはとても綺麗で器用な人で、人形などをよく手作りしてくれたという。

写真③は、恐らく明治三十三年頃に撮影されたものである。

写真④は、志茂シズ・テイ姉妹が同居していた勘解由小路康子と写っているものである。中央のやや年長の女性は、同じく同居していた勘解由小路富久子かも知れない。写真④のテイは、写真③と同じ着物を着ていることから、近い時期のものか。上京後まもなくの記念撮影かも知れない。



【写真③】テイ



【写真④】左より、テイ、一人未詳、勘解由小路康子、シズ

写真⑤は、実践女学校の制服姿のテイである。裏によく見えないが《三年十月》らしき文字とはっきりと《十二年九ヶ月》の文字が窺える。テイが明治二十一年二月三日生まれであることも考え合わせると、明治三十三年十月のものか。  
写真⑥と⑦のテイは、同じ着物を着ているから、近い時期のものかも知れない。



【写真⑤】テイ



【写真⑥】テイ



【写真⑦】後列左より三人目がテイ

写真⑧は、『明治三十五年九月五日』と裏書きがある志茂シズ・テイ姉妹の写真である。  
写真⑨は、左右に座っているのが志茂シズ・テイ姉妹である。



【写真⑧】左より、シズ、テイ



【写真⑨】左より、テイ、一人未詳、シズ





【写真⑩】左より、テイ、ウタ、シズ、二人未詳

写真⑩は、志茂ウタ・シズ・テイ三姉妹が写っている。女学校卒業後のものか。  
 写真⑪は、裏に《香村貞子》の文字が読みとれる。  
 写真⑫も、恐らく結婚後のテイであろう。



【写真⑫】テイ



【写真⑪】テイ

写真⑬は、テイと子供たちの写真である。テイの長男・肇は、明治四十一年一月七日に生まれたが、同日亡くなっている。次男の昇二郎は明治四十二年四月二十一日生まれ、長女・ひろは明治四十四年二月二十八日生まれである。子供たちの成長の様子から見て、恐らく明治四十五年初め頃の撮影であろう。武者小路実篤がテイに生涯最後に会ったのは、明治四十四年五月十二日のことであるから、実篤の眼に残ったテイの面影は、この写真とさほど違っていないかったろう。

なお、南木家には、学習院の制服姿の武者小路実篤と勘解由小路資承らの集合写真（『新潮日本文学アルバム 武者小路実篤』九頁に掲載。）や写真⑭の川口武定・直子夫妻の写真も残されていた。川口夫妻の写真の裏には『宮内次官 男爵 川口武定 夫人直子』とある。川口直子は、武者小路秋子・勘解由小路資承の妹に当たる。交際の記念に贈られた写真であろう。



【写真⑬】中央、テイと次男・昇二郎。右の子供が長女・ひろ。左右の二人は未詳



【写真⑭】川口武定・直子

【付記】写真を提供して下さった南木紅子・純・紳三兄弟にこの場を借りて深く御礼申し上げます。また南木芳太郎・シズ夫妻の三男に当たられる南木薫三氏、香村英太郎・テイ夫妻の孫に当たられる久保田幸子氏には様々なご教示に預かりました。篤く御礼申し上げます。